

## 基礎看護実習における学生の 身体内部構造の捉え方の特徴 － 看護実践につながった 場面に焦点をあてて－

矢野 智子（基礎看護学）

**【キーワード】** 看護実践・身体内部構造・基礎看護実習・学生

本研究の目的は、基礎看護実習において、看護実践につながった学生の身体内部構造の捉え方の特徴を明らかにすることである。研究対象は、看護大学2年次に実施された基礎看護実習において、研究者が直接実習指導者として担当した看護学生のうち、本研究への参加同意が得られた学生である。研究方法は、学生の実習記録をもとに5日間の看護実践を概観し、学生が身体内部構造を捉えたことで看護実践につながったと思われた6事例14場面を選定した。選定した場面について、学生の認識をより浮き彫りにするために、基礎看護実習と振り返り授業終了後、対象学生へのインタビューを行った。実習記録とインタビューを元に研究素材を作成した。各場面について局面ごとに身体内部構造の捉え方の特徴を抽出し、【看護実践につながる学生の身体内部構造の捉え方の特徴】として抽出した。すべての局面について共通性・相異性を検討したところ、学習初期の学生の看護実践につながる身体内部構造の捉え方の特徴として、以下の6つが明らかになった。

- 1.患者の痛みや苦痛を実感を伴って感じとり、それらはからだのどのような状態から生じ、どのような生活行動の幅を狭めているかと捉えている。
- 2.患者の苦痛や冷感は末梢血管が収縮している状態と捉え、温めることで苦痛や痛みが緩和し、末梢循環が整い、全身の血液循環を高めることにつながると捉えている。
- 3.患者の生活行動の変化は、局所のどのような状態の変化から生じ、全身の状態の変化につながって

いるかと捉えている。

- 4.患者の痛みや苦痛を直接緩和することができないときでも、快の刺激によって苦痛に向いている意識をそらすことができると捉えている。
- 5.目で見てとれた異常な状態は、健康な状態からどのようなプロセスで変化したのかと患者の日常生活と重ねて捉えている。
- 6.患者のいつもと違う反応から、それまで捉えていたからだの状態を思い起こし、どのような変化から生じているかと捉えている。